

1 作品タイトル：リングズ  
著者名（※ペンネーム）：横山 土筆（よこやま つくし）  
あらすじ：高校三年生のケンは何人かの恋人のミナにももらったブレスレットを失くし、新たに指輪を渡される。ミナと別れて大学に入ってから、ケンは何人かで買ってつけていた指輪を恋人にあげるも、その指輪を失くされる。卒業間際、ケンは何人かから贈られた指輪を見つけ、指輪をめぐる彼の記憶が重なる。  
5 特記事項：恋愛小説としても読めますが、恋愛そのものよりも、生きていくなかで何かを失くすとはどういうことなのかを探っています。語り方や視覚的モチーフの使用を工夫しながら、映像作品の原案となりうる、それでいて文章を素材とする小説というジャンルの強度も残すことを意識しました。  
10 本編の文字数：4985字

「目、瞑ってて」

15 ミナがそう言うときは、キスをしたくなかったか首を噛みたくなかったかのどっちかだったから、ケンは何人かされた通りに顔を閉じた。そうしたら手を握られた。いいよ、の合図で目を開けると、右手の小指にピンクリングが嵌まっていた。

「もう失くさないでね」

20 ペットの犬か猫に言うみたいな、真顔なんだけど、優しさを含めて意地悪を言うような顔だった。ごめん、と返してすぐ、ありがとうが先だな、と頭のなかで反省して、ありがとう、と指を見た。ミナは満足げにくすくす笑いながらケンの目を見つめている。

空が紫色になってそれを背景に松の木が黒い影絵のようになった頃、ふたりは城山公園のベンチから立ち上がって帰ることにした。ミナと手を繋ぎながら歩くのはまだ恥ずかしい。ミナの家の近くでばいばいをして、ケンはイヤフォンを耳につける。ミナはスカートが短いから、後ろ姿を眺めているとパンツが見えそうになって不安になる。ゆっくりと足で音楽を確かめるように来た道を戻る。乾いて皮がめくれた唇に向かって風が吹きつける。

付き合い始めてしばらく経って、いつものように放課後に寄り道をしながら帰っている途中に、記念日だとかそういう特別な理由があるわけではなく、ブレスレットをもらった。秋の終わりで、学ランの下にカーディガンを着ていたから、手首が隠れて他の生徒の目につきづらいというもたぶんあったのだろう。積極的に隠そうとしていたわけではないけど、付き合っていることを自分たちから、少なくとも自分からは言っていなかったし、向こうもそれをなんとなく了解していた。そういうなかでふたりの関係を実感をもって握りしめるのに、カーディガンの陰でたしかな位置を占めるブレスレットは適切な道具に思えた。

35 けれど、それが仇となって、日常的につけていたブレスレットを落としてしまった。夜、友人の家から自宅へと自転車で帰ったあと、手首がスースーするのに気づいた。慌て

て携帯のライトで夜道を照らしながら探した。落としてしまったこともそうだし、それで  
40 自分がおろおろして、友人に電話をして部屋に落ちていないか確認してもらっているほど  
の状態になっていることにも居心地が悪かった。秋の寒さがいやだった。

ついに見つからず、家に戻ってメールを打った。

「ちょっと話したいことがあるんだけど、電話できる？」

少ししてから返信がきて、いまお風呂上がりだから、ちょっと待ってて、と表示され  
45 た。それから十五分か二十分ぐらいして、いいよ、と連絡があった。

「本当にごめん」

「なに、どうしたの」

「めっちゃめっちゃ言いづらいんだけど」

「なに」

50 経緯を説明して、何度も謝った。取り返しのつかないことをしてしまった、みたいな、  
振り返って考えれば大袈裟に感じるような、でもそのときは本心からの言葉を、繰り返して  
いた。それを聞き終えた彼女は、

「それだけですか？」

と、ぶっきらぼうにも聞こえるトーンで返した。いや、そう、ごめん、などと文以前の  
55 発語をしていたら、溜息が聞こえた後に、別にいいよ、と彼女は言った。別れ話をされる  
かと思ってドライヤーで髪を乾かしながら憂鬱な気分になっていた、電話なんてしたくな  
いと思っていた、電話をしたら案の定暗い感じでいきなり謝られたからもうだめだと感じ  
た、そしたらなんか想定外の話をされて、この人はいったい何をそんなに落ち込んでいる  
60 んだろう、そんな重い罪をしたみたいなノリで謝られても、と、安心しながら呆れたらし  
い。

指輪をもらったのは、その電話からしばらく経ってのことだった。

「これなら学校の日はずけなくていいから失くしづらいでしょ。休みの日に会うときはつ  
けてもつけなくてもいいよ」

「でも小さいから失くしそう」

65 「それ一点物だから」

「ブレスレットもだったよね。ごめん」

「もういいから。なんであなたはいつも謝らなさそうな感じなのにこういうことはしつこ  
いぐらい謝るの」

いやあ、自分でも困るぐらい申し訳なく感じるんだよ、と言いつつをしながら、ベンチの  
70 屋根に日が落ちてしばらく経つまで並んで座り続けた。そういえば、はっきりとは覚えて  
いないけれど、彼女と最初に言葉を交わしたときも自分は謝っていたらしい。

高校三年になったばかりの頃、何かで急いでいたんだろう、小走りで教室から出ようと  
したところで、ミナとぶつかりそうになった。あ、ごめんなさい、と咄嗟に言った。彼女  
は何も返さなかった、と後になってから聞いた。新学期、教室の後ろのほうの席にいかつ  
75 そうな人がいて、なるべく関わらないようにしようと思っていたが、その人とぶつかりそ  
うになったとき、すぐに謝られて、この人は謝るんだ、とびっくりして言葉が出なかった

という。それが最初に気になったきっかけだった、と告白のときに教えてもらった。なん  
でそれが好意につながるのかよくわからなかったけど、はたから見ればどうでもよさそう  
な、自分でも忘れていた自分のことをそこまで覚えてくれていたことが嬉しかった。

80 謝ることと反省することは別だから、失くすリスクを抱えつつも、学校の日には学ラン  
のポケットに指輪を入れて、一緒に帰るときにはつけるようにした。ミナは潰れてしま  
いそうなくらい強く抱きしめられることをよく求めていたが、ケンは体を重ねるよりもアク  
セサリーをつけあうことのほうが付き合うことを保証されるような気分だった。手を繋ぎ  
ながら歩くとき、とくに何かを言うわけではなくても、横に顔を向けて見つめ合わなくて  
85 も、ミナが小指に指輪があるのを確かめるようなぞる仕草を感じるだけで愛が伝わって  
きた。

\*

90 「前から質問したいことがあったんですけど、いいですか？」

最終コマが終わる五分ほど前、指導報告書に今日の授業内容を書いていると生徒がそう  
言った。ボールペンの動きを止めて、なに？ と顔を上げる。

「先生のつけてるリングってどこで買ったんですか？」

「これ？ 白洲中学校のそばに酒屋さんがあるでしょ。あの通りにあるちょっと怪しい外  
95 観の輸入雑貨店わかるかな、両方ともそこで買ったやつだよ」

「やっぱり！ こないだあそこに行って、リングのコーナー見ながら先生ののに雰囲気似て  
ると思ったんです」

ボールペンのグリップの位置を持ち替えながら、あの店よく行っとるの？ と返す。

「いや、ずっと麻薬とか売ってそうだと思ってたんですけど、こないだ初めて友達と五人  
100 ぐらいで行ったんです」

「あの狭い店内に女子高生五人いる光景はだいぶ恐ろしいね」

「ひとりじゃ怖くて。最初の授業のときからリングが気になってて、結婚してるのかと  
思ったんですけど、左手の薬指にはついてないから」

「これが結婚指輪だったらいかついでしょ。こっちは大学一年のときに買ってからずっと  
105 つけてて、だからもう三年ぐらいになるのかな。ブラックスターっていう宝石なんだけ  
ど、ネガティブなものを遠ざけてくれるって店主の人が言ってたから、お守りみたい  
になってるんかもせんね。こっちの方はわりと最近買ったやつ。まあでも、どっちもとくに  
意味はないよ」

「なるほど、ずっとモヤモヤしてたのがすっきりしました！」

110 あそこは良い店だからまた行くといいよ、と話をゆっくり終わらせるように返して授業  
内容を書き終え、講師名の欄にサインをした。生徒は、お小遣い入ったら行こうと思いま  
す、と屈託ない声で言いながらクリアファイルに英語のプリントをしまった。

チャイムが鳴ると、指導報告書を教室長の机の上に置き、生徒をビルの玄関のところで  
見送り、もういちどバイト先の個別指導塾が入っている一室に戻った。講師用の椅子に

115 座ってポケットからスマホを取り出す。いっつも見送るの早いね、と向かいに座っている  
先輩に声をかけられて、どうすかね、他の人が遅いんだと思いますよ、と答えた。さっき  
指輪の話してたよね、前から思ってたんだけど、それって殴ると痛そうだよ、そう先輩  
が話題を変えたから、スマホを持っていた自分の右手の薬指を見る。

「うーん、殴ったことないからわからないです。石の部分がメリケンサックみたいってこ  
120 とですか？」

「うん。それ見るたびに痛そうだなと思うよ。そっちのはあんまり痛くないのかな」  
「どうだろう、たぶんあんまり変わらないですよ。でも左手だから、殴るとしたら弱くなり  
125 そうです」

ふたりの視線は自分の左手の人差し指に移っていた。シルバーベースのリングで、真ん  
125 中にターコイズが帯状に入っている。なんとなく新しいリングを買おうという気分になっ  
たけど、どうして自分はこれを選んだんだろうとぼんやり考える。もう雪も降り始めそう  
な季節だったから、まろやかな寒色が外気の冷たさをぜんぶ引き受けてくれそうで、今の  
時期にちょうどいいと思ったのかもしれない。青のリングでも、ターコイズと、たとえば  
ラピスラズリとかアイオライトなんかとではぜんぜん違う。ターコイズはまろやかで、冬  
130 にコンビニの前の灰皿でタバコを吸いながら飲むココアに似ている。

数週間後の日曜日の午後、ベッドで隣で仰向けになっているハナに、してる時もこっ  
ちは外さないよね、と左手をさすられた。右手は前戯のときに当たったら痛いだろうけ  
ど、こっちはそもそも当たらないからね、と返す。

135 「ふーん。これかわいい。ケンが青系持ってるの珍しくない？」

「そう？ そうかも」

「そうだよ。黒とかばっかりじゃん。なんでこの色買ったの？」

明確な理由があったわけじゃないけど、と言おうとしたところで、彼女の着ていたコー  
トが目に入った。

140 「よくブルーのコート着てるでしょ。きれいな色だなと思ってて、それでよく似た色合い  
のが店にあったから」

何それ、嘘でしょ、と笑いながらも彼女は満足げだったから、ほんとだよ、と嘘を重ね  
て、いる？ と聞いた。

「え、いいの？」

145 「こういう色、似合ってるよ。元々そのコートが似合ってるって思いながらこれも買った  
んだし、俺よりも似合うんじゃないかな」

ハナの指には少し大きめではあったが、嬉しそうに見えたからいいか、と思った。これ  
つけてるとみんなからなんか言われるかな、と気にしていた彼女に、別に隠してるわけ  
じゃないしいんじゃない、と言って、その日はふたりで味噌ラーメンを食べに行ってか  
150 ら解散した。味はふつうだった。

別の日、大学の授業を終えて、部室ですこし時間を潰してから、原付で一分で着くバイ  
ト先に向かった。裏口にある駐輪場に原付を停めると、すぐそばの灰皿の横に腰を下ろ

し、生徒や保護者に見られない位置を探して一服する。吸い終えた後、灰皿の上にくしゃくしゃになって置かれていた空箱を穴の奥に押し込んでから教室に入った。

155 「あれ、指輪減ってる？」

講師用スペースで作業をしていた先輩に声をかけられた。説明がめんどうだと思って、失くしちゃったんですね、と返した。

「えー、残念だったね。私あの指輪は綺麗だと思ってたのに。そっちは殴られそうだなとしか思わないけど」

160 ほんとは残念ですよ、と神妙な顔をつくる。

数日後、ソファに座ってハナと話していたら、指輪が手から消えていた。今日は指輪してないの？ と聞くと、彼女は、ああ、そうそう、と思い出したように、洗濯機の後ろに落としちゃったんよ、と言った。お風呂入る前に置いてたら、間違えて落ちて、取れなくなったの。取ろうとしたんだけど、動かせる感じじゃなくて。

165 \*

大学の卒業式を終え、引越しのために実家で埃をかぶった文机の抽斗を整理していると、ジッパー付きの小さなポリ袋に入ったピンキーリングが出てきた。袋から取り出して手のなかで転がす。こんなに軽くて脆そうなつくりだったっけ。何の装飾もない、シンプルで細い指輪。それはほとんど、何かの家具を組み立てるときにどこで使うのかわからないまま最後まで残ってしまった部品のように見える。

170 ミナと別れ話をしたのは高校を卒業した三月の末だった。いつも一緒にいたのとは別の公園のベンチに座りながら、ミナはこちらを見ずに、何も言わずに涙を流していた。向かいの川の水面に反射する夕日をさらに反射したみたいに、まつげの下から赤みがかった頬へと流れる水はきらきらと輝いていてきれいだった。その目元を拭う自分の手の小指にはすでに何もついていなかったと思う。

もういちど指輪を手のなかで確かめるように転がすと、ケンはそれをゴミ袋のなかに入れてから、机の上の古紙の山を捨てる作業に戻った。